

今から100年前の1920年代、つまり大正の終わりから昭和の初めは、出版界が急激に拡大した時代でした。

1923年の関東大震災を乗り越えるかのように、雑誌と書籍の流通が結びついて日本全国にはりめぐらされた販路を通してベストセラーが続々と生まれ、週刊誌も誕生し、円本の文学全集による教養熱が高まり、雑誌『キング』は100万部を突破しました。ラジコやレコードとのタイアップが広まり、性科学など女性のための教養書も刊行されます。書店が増え、再販制度の原型が現れ、印刷技術も進歩し、出版点数は飛躍的に増えました。まさにベンチャー精神に満ちあふれ、現在に至る出版ビジネスの基礎が確立した時代と言えます。

ちなみに1920年代のヨーロッパでは、初めて「ロボット」という言葉が登場する戯曲『R・U・R』が書かれ、映画『メトロポリス』が上映されました。ともに人工知能と人間社会の軋轢を描くもので、現在のAI論争の先駆けと言えます。

その後、戦時下と占領下における出版統制と言論弾圧という試練がありました。1950年代に再び出版界全体の立て直しが始まり、1953年にはこの日本出版クラブが設立され、今年70周年を迎えました。

このように、私たちの先人たちは、困難な時代においても実にたくましく働き、知恵と知識を、多様な価値観を、心を豊かにする物語を、日常を彩る娯楽を、孤独な魂には居場所を、提供してきました。そして、目の前の厳しい現実をも乗り越える、精神の自由をこの社会に広めてきました。

今、出版界は大きな変化の局面にあります。デジタルプラットフォームが情報の流通を大きく変え、コロナ禍はその変化を加速しました。さらにAIの進歩はクリエイティブの本質とは何かを私たちに突きつけています。近年、出版業界の未来に悲観的な声が聞かれるのも事実です。

このような状況で思い出すのが、生涯、自由な精神を追い求めた堀田善衛さんです。

移動し、行動し、世界中の人々と交流し、真にグローバルな視座で考え続けた方でした。そして、どんな状況においても悲観せず、ひたすら観察した方でした。そのため補助線として、鴨長明やゴヤ、モンテーニュら、かつて戦乱の時代を観察した人々の思考と感性を丁寧にたどりました。

そんな堀田さんは「現在は過去と未来を内包する」、そして「歴史は繰り返さず、人これを繰り返す」と語っています。

我田引水ではありませんが、かつて出版文化を築いた先人たちの精神を想像すると、そこで私たちが何よりも大切に受け継ぐべきは、冒険心に満ちあふれ、精神の自由を追い求めた、そのたくましい魂ではないでしょうか。

堀田さんとはかく考え続けた方でしたが、私たちが今の出版界あるいは社会の課題についてどんなに考えても、答えは得られないかもしれません。しかし、何がわからないかがわかれば、それは誰かと共有できます。個人を超え、組織を超え、業界を超えてつながることもできるはずです。

そして現在の出版界には、先人たちが残してくれた大きな財産があります。それは社会からの信頼です。今も多くの読者と才能は、書物というメディアに特別なリスペクトを抱いてくれています。また、書店が地域のコミュニティとして再評価される動きも、各地で起きています。

100年にわたる先人たちの仕事の上に私たちが今立っていることに感謝しつつ、この先の100年の道筋をつけるのが私たちの仕事であることをあらためて確認し、第62回全出版人大会の声明といたします。

2023年5月8日